

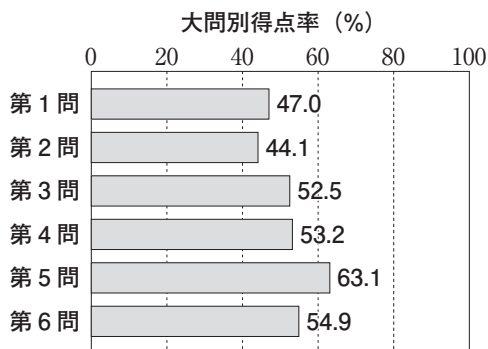
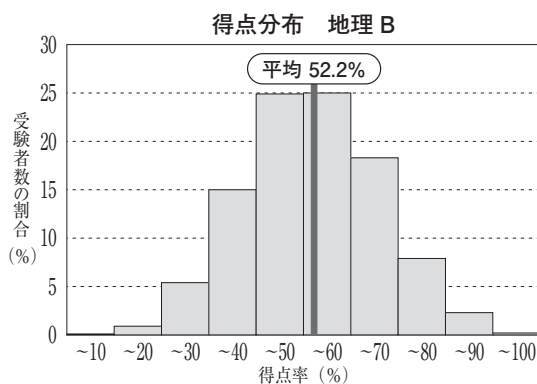
地 理 B

高校地理の基礎知識と図表問題を読み解く力を早く身につけよう！

I. 全体講評

受験学年の平均点は52.2点であり、今年のセンター試験本試験の平均点67.99点を15点以上も下回った。センター本番まで約2か月半となったが、未だに高校地理の基礎知識を身につけていない受験者が多い。正答率の低かった問題のうち、解答番号1, 3, 5, 10, 24などは、明らかに基礎知識の不足が原因である。地理は暗記科目ではないが、教科書・図説資料集レベルの基本を押さえていなければ勝負にならない。また、統計図表問題を読み解く力も十分なレベルに達しておらず、解答番号11, 15, 17, 26, 30などの出来の悪さにそれが表われた。

Ⅲ. 学習アドバイスを参考にして、高校地理全体の基礎知識と統計図表問題を読み解く力を早めに身につけたい。



II. 大問別分析

第1問 世界の自然環境と自然災害・環境問題

自然地理は最重要分野。教科書・図説資料集レベルの基礎知識を早く身につけよう！

自然地理分野はセンター試験に必ず大問が出題され、かつ、他分野を理解するための基礎にもなる最重要分野であるが、大問全体の平均得点率は47.0%と6つの大問中で2番目に低く、振るわなかった。問1、問3、問5の正答率がそれぞれ39.1%、24.1%、38.4%と4割を下回ったが、いずれも基礎知識不足に起因する。問1は、グレートアーテジアン(大鑽井)盆地の被圧地下水が、基盤岩の露出した楕状地ではなく、地層の発達した卓状地に分布するとわかっていない受験者が多かった。ほとんどの図説資料集に被圧地下水と地層の関係を示す図が載っているので確認しておくこと。問3は、ハリケーンなどの熱帯低気圧が海上で発生することを知らない受験者が多かった。熱帯低気圧の発生する海域と進行方向を、図説資料集等を参考にして頭に入れよう。問5は、東北日本弧が北アメリカプレート上にあることを知らず、空欄イに該当する語をユーラシアプレートと判断した受験者が全体の46.4%に達してしまった。教科書または図説資料集で日本列島周辺のプレートの位置関係を正確に把握しておくこと。

第2問 経済活動とグローバル化

エコツーリズム・グリーンツーリズム等の観光形態について正確に理解しておこう。

大問全体の平均得点率は44.1%であり、6つの大問中で最も低かった。正答率が60%を超えた小問は一つも無く、全体的に低調であった。最も正答率が低かったのは問4であるが、誤答②の選択率40.3%が、正答率29.9%を大きく上回ってしまった。エコツーリズムとグリーンツーリズムの語義を正確に捉えていない受験者が多かったためである。観光業に関わる用語の意味を復習しておくこと。問5の正答率も31.0%と低かったが、アメリカ合衆国

のグラフであるイを、中国のものと判断してしまった受験者が、全体の48.3%に達した。中国に本格的に外国企業が進出し始めた時期は1980年代以降であるが、そのことに考えの至らない受験者が多かった。このレベルの統計図表問題をしっかり解けるように、センター試験本番形式の問題集などでトレーニングを積んでおくこと。

第3問 民族・生活文化と村落・都市

統計図表問題の出来が悪かった。演習を重ねて図表を読み解く能力を高めよう！

大問全体の平均得点率は52.5%であり、やや物足りない結果となった。統計図表問題の問3と問5の正答率が、それぞれ33.6%、29.3%と低かった。問3は、カを小麦ではなく畜産品と判断してしまった受験者が多かったが(全体の63.3%)、昭和中期にあたる1960年の時点では、畜産品(特に肉類)はまだ贅沢品であり、小麦や魚介類からの摂取カロリーを下回っていた。日本の長期統計を扱った図表問題に多く接し、頭の中で、時代と経済水準を正しく結びつけられるようにしておきたい。問5は、オーストラリアに該当するサをドイツのものと判断してしまった受験者が多かったが(全体の56.1%)、EU最大の人口を持ち、国全体に都市が分布するドイツで、人口50万人未満の都市が上位12都市に6つも入ってくるなど、冷静に考えればあり得ない。データを丁寧に読んで、このレベルの問題を確実に正解できるよう、過去問やセンター試験本番形式の問題集で統計図表問題に慣れておきたい。

第4問 アフリカ

用語を単に暗記するのではなく、それに関する必要な内容を理解すること。

大問全体の平均得点率は53.2%であった。ネリカ米に関する理解が不十分であったため、問6の正答率が30.4%と低くなった。ネリカ米という語句は頭に入っている、高収量かつ病害虫に強いという特徴や、アフリカにおいて普及が進んでいるという実情を正しく理解していない受験者が多かった。地理は事物を示す用語の暗記だけで得点を伸ばせる科目ではない。教科書、図説資料集、用語集などで、事物の特徴、事物と地域とのかかわりなどを正しく理解していくことが必要である。

第5問 BRICs

出題頻度の高いBRICsを扱った大問で好結果が出た。自信を持とう！

大問全体の平均得点率は63.1%であり、6つの大問中で最も高かった。出題頻度の高いブラジル、ロシア、インド、中国の4か国を対象にした地誌の大問で良い結果が出たことは喜ばしい。自信を持とう。問2の正答率のみ38.9%とやや低かったが、多くの受験者が死亡率の低いアを、BRICsの中では経済水準の高いロシアと判断してしまった。経済水準・医療水準の高めな国でも、少子高齢化が進んでいる場合は死亡率が高くなるので、頭に入れておこう。

第6問 地域調査(京都府)

大都市に近いほど昼夜間人口比率が高いわけではない。しっかり認識しておくこと。

大問全体の平均得点率は54.9%であり、6つの大問中で2番目に高かった。全体的によく出来ていたが、問1の誤答①の選択率が39.6%と高い数値になったのが気になる(正答率は45.2%)。①を選んだ受験者は、中心地機能の強い京都市下京区に近い城陽市の昼夜間人口比率の方が、遠方にある宮津市のそれより高いと考えたわけだが、実はそうではない。大都市に近い中小都市は、大都市に通勤・通学する人が多いため、一般に昼夜間人口比率が低くなる。ここでしっかりと認識しておきたい。

Ⅲ. 学習アドバイス

センター試験まで約2か月半となった。今回の模試を復習して、未だに教科書・図説資料集レベルの基礎知識が不足していると感じた受験者は、まずはそれらを熟読し、内容を理解すること。それを済ませた受験者は、出来るだけ早くセンター試験本番形式の問題集に取り組むこと。しばらくは60分の試験時間にこだわらず、教科書、図説資料集、用語集、地図帳等を参考にしながら、100点満点をとるつもりでじっくり問題に向き合うとよい。文の正誤判定の問題なら、正解以外の選択肢についても、理由をはっきりさせた上で正文か誤文かを判定する。統計図表問題なら、すべての選択肢について該当する国、都市、産品等を、根拠を明確にした上で特定する。このような演習を繰り返せば、高校地理全体の基礎・重要事項を復習し、図表問題を読み解く力を育むことができる。